

スクリーンライター 私たちの映画史

● 秋山みよ
● 宮本衣子
● 中尾壽美子
● 白鳥あかね
聞き書き 桂 千穂

「日本映画の黄金時代を記録した
ベテランスクリーンライターが語る

聞き書き日本映画史

この本の「まえがき」にあるように、スクリーンライターとは撮影のすべての現場で演出家に付き添い、細大漏らさずデータを記録し、撮影終了後は編集からダビングと一本の映画の完成まで一切の処理を助ける人。作品の全過程に立ち会い作品の中心にいながら、裏方に徹した地味な存在である。スクリーンライターは映像現場で女性が最も多く活躍している職種であることは知られていたが、その実態を知る情報はあまりなかった。

学生時代、日活の無頼シリーズに夢中になっていった時期、スチール写真などで



金屏風の前で祝辞をうける面々。左から著者の桂氏、白鳥、中尾、宮本、秋本各氏。会場には…大林宣彦、澤井信一郎、若松孝二、相米慎二、大島渚、藤田敏八、舛田利雄、中原俊、降旗康男、根岸吉太郎…ニコニコ顔の監督さんたちがいっぱい。スクリーンライターさん、お世話になってまーす！

監督や役者の脇に颯爽とノートを持って立つ帽子を被った女性を見て羨ましいと思っただけがある。お金が貰えて憧れの渡哲也といつも一緒にいられるなんて素晴らしい仕事だなあとミスター的な興味で思った。しかし、どのようにしたらいいのか、どんな経歴の女性になっていくのかを知るすべはほとんどなかった。この本はそのスクリーンライターのバイオニア的存在の4人が、桂千穂氏の巧みな話術に答えてどのようなきっかけで仕事に出会い、どのような人とどんな事をしてきたか、伸び伸びと語ったものである。



◆秋山みよ 女学校の教師を経て大映京都に入社。「地獄門」「大仏開眼」など多数の衣笠貞之助作品に携わったほか、吉村公三郎、マキノ雅弘、久松静児など巨匠監督のスクリーンライターを務める。昭和29年日活に入社。後進の指導にあたり、石原裕次郎、吉永小百合らスターたちと日活の全盛期で活躍。ロマンポルノ後期にプロデューサーに転身。

さらに、彼女たちの仕事現場がスクリーンライターを置かなかった松竹を除いて日活、大映、東映、東宝、独立プロとうまく分かれていて、会話の面白さに引かれて読んで行くうちに本全体が壮大な現場からの女性が語る日本映画史となってくる。彼女たちが携わった作品が欄外に年代順にリストアップされているので映画資料としても十分活用できるのでありがたい。

4人の中では秋山みよ、宮本衣子、中尾壽美子諸氏が不正10年前後のお生まれ。白鳥あかねさんは昭和7年。筆者は



◆中尾壽美子

カメラマンだった兄の駿一郎の影響で東宝に入社。東宝争議を体験し、後に退社し、独立プロ作品を手がける。『戦争と平和』『酔いどれ天使』『原爆の子』『夜明け前』『蟻の街のマリア』。

◆宮本衣子

文部省勤務を経て大泉スタジオ（東映）に入社。『女の顔』が初仕事。『飢餓海峽』以降は東映のヤクザ路線。『網走番外地』『昭和残侠伝』シリーズを手がけ、現役で活躍中。

出版パーティに出席して4人の大先輩がたを直接拝見したがみなパワフルで、はつらつとしており、失礼だがぜんぜんそのお年にも見えない。また、みな高学歴で、教養が高く、しかもまじめで頑張りや、さらに心身ともに健康な方たちである。宮本さんは途中結核になられたが、フィルム編集の仕事に移って病気を克服、復帰されたそう。とにかくくすすべての現場に立ち会うわけだから強い仕事への意志がないとやっていけないのではないかと思う。4人のうちご結婚なされているのは白鳥あかねさん。同僚のうち結婚でやめていく人がほとんどということ、逆に残った人はそちらを諦めて仕事を選んだということかもしれない。でもそのよ



◆聞き書き 桂千穂（左2人目）シナリオライター。昭和17年『薔薇の標的』『白鳥の歌なんか聞こえない』でデビュー。『黒薔薇夫人』『暴行切り裂きジャック』『HOUSE・ハウス』『アイコ16歳』『俗物図鑑』『廃市』『ふたり』など作品多数。映画人の聞き書きを精力的に担うことをはじめ、翻訳家、映画評論家としても活躍中。

会場には、この本を企画した『映画芸術』編集長の荒井晴彦氏はじめ、鈴木尚之氏、佐伯俊道氏などシナリオライターの方々もいっぱい。桂氏とお話し中の井上正子さん、丸山昇一氏の間割り込んで記念写真を一枚。

『スクリーンライターたちの映画史』
発行所 日本テレビ放送網（株）
定価 2,000円



◆白鳥あかね

日本映画スクリーンライター協会設立、現副会長。昭和30年日活に入社。『渡り鳥シリーズ』『恋人たちは濡れた』『帰らざる日々』『遠雷』『乳房』など藤田敏八、神代辰巳、根岸吉太郎作品を多く手がける。

うな気負いは会話にはなく、好きだから、ラッキーだったから続けてこれたと話されている。また男ばかりの映像現場でのセクハラのような問題に関してはみな様さらりと受け流しておられる。本当はどうだったのだろう。実力のある女性たちがそういう問題に直面した時、どのように乗り越えたのだろう。もし続編が作られるとしたらぜひその辺の裏話（ー）を後輩の映画に携わる女性たちにアドバイスしていただきたいと思う。

それにしても赤木圭一郎がゴーカード事故で死んだ時のこと、高倉健が江利チエミとの結婚を打ち明けた話、いまは亡き浦山桐郎がハーモニカを吹くエピソードなど興味ある話しがゴシップでなく身近かな体談として自然に語られていて日本映画ファンには本当に楽しい一冊である。（出海）